

# ひょうたん島通信

大槌発! 第32回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



## 今だけしか見られない風景

### 菊地眞悟

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター  
事務室 専門職員

今年度より、大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター事務室に着任しました菊地眞悟と申します。宜しくお願ひします。岩手県内陸部出身である私は、趣味のドライブで県内各市町村を走っていましたが、震災前までは、県沿岸部市町村のうち、なぜか大槌町のみ、足を踏み入れたことすらありませんでした。震災から半年後、2011年9月の連休中にボランティア活動で釜石市内での作業に参加する機会があり、その足を延ばして大槌の地を初めて踏みしめて以来、4年半経った今、県内で、実家以外に初めて腰を据える土地が、ここ大槌町となったことに不思議な縁を感じます。

震災から半年後の大槌町は、未だ瓦礫が残り、地盤沈下した道路には波が押し寄せ、水飛沫を上げて工事車両が走る状況でした。現在は、瓦礫は見えなくなりましたが、数メートル単位の嵩上げのために高く盛られた土が道路の両脇に壁を作り、土煙を上げて工事車両が走っています。新棟建設のために学内外各方面と共に歩みを進めていますが、階下に津波の爪痕が残るセンター棟仮復旧部で業務

していると、復興どころか復旧も道半ばの感がしてなりません。

大槌での生活が始まって数週間、テレビの画面に目を覆いたくなるような光景が広がっていました。熊本地方地震です。

津波は発生しませんでした、倒壊した家屋や地割れ、土砂崩れの映像は、東北出身者の私にとっても他人事ではないと思われました。この思いは大槌町の方々も同じで、東日本大震災の際に助けて頂いた分、今こそ恩返しの時と、手作りの募金箱で熊本地方地震被災者への義援金を募る仮設商店街の方々の姿は、東北人の優しさと、その芯にある逞しさが滲み出ているものと感じています。

センター棟の面前には、穏やかな大槌湾の風景が広がっています。震災前は数

県道の両脇に高く盛られた土。他県ナンバーのダンプが走り抜けます。



メートルの高さの防潮堤が目隠しをしていたようですが、津波により防潮堤が倒壊した結果として、美しい海の景色が見られるようになったとのことです。新棟は現在地より海から離れた高台に移転するため、この景色を見られるのは今だけです。当センターでは、来る7月16日土曜日、震災後2回目となる一般公開を開催します。海の日を含めた三連休初日に、三陸観光ついでに、当センターに足を延ばして、今だけの景色をご覧になられては如何ですか。

センターから臨む大槌湾の景色。



## 調査船「弥生のつばやき」 海洋環境臨海実習 in 大槌



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のびーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

今年も大槌のセンターで大学院生対象の実習が行われました。一部で他の授業スケジュールと重複したため参加者は総勢6名でしたが、熱意溢れる学生さんばかりが集まってくれました。初日は、私の同僚グランメニューが出陣しての地曳網調査です。人数が不足、センターは事務職員まで動員しての総力戦です。春の海風に吹かれて重い網を引く学生さんたちの顔はキラキラと輝いていました。翌日は、採水、採泥など海洋調査の実地体験。いよいよ私の出番です。しかし朝か

らあいにくの曇天で、風と波も穏やかとは言えません。船に慣れぬ学生さんを慮って、船長の操船もいつになく慎重です。しかし帰港する頃には海鳥など観察する余裕を得た学生さんたちとは対照的に、付き添いの教員が青い顔をしていましたよ。最終日は岩手県水産技術センターにお邪魔して、大学とは異なる視点からの調査研究を学んだようです。日頃あまり触れることの無い若々しい笑顔に、私まで元気を貰いました。これからもぜひ大勢の学生さんたちに来て欲しいと願って

います。



地曳網実習風景。サケ、アユの稚魚、カレイ、フグ、ギンボ類など大槌ではお馴染みの魚類が採集されました。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）